

「テングサと寒天」の「よもやま話」

はじめに

寒天の原料は、テングサですが、これにはマクサ、オニクサ、ヒラクサ、オバクサ、トリアシ等の海藻が該当します。テングサは、戦前、日本各地のみならず樺太、朝鮮半島等の海から採取されました。一例として、「伊勢の海女さん達の利尻島へ出稼ぎ」についての文献があります¹⁾。かつて寒天は、「我国生産の原料を使用し、製品の世界生産量のほとんどを我国が占めている特殊産業」として優等生的な花形の輸出品でした²⁾。寒天産業の成立、生産地の変遷、衰退について、ここ数年、文献、ヒヤリング、現地調査を進めてきました。その概略を紹介します。

1 海の藻が内陸に運ばれて寒天に？

鉄道・道路網が整備される前、何故、海藻のテングサが、海から程よい距離にある内陸に運ばれて、寒天になったのか。これには、河川の舟運、冬場の寒冷な気温、豊富な水と燃料、良質な労働力が必須の条件でした。これら「自然環境」と「社会条件」の絶妙なバランスが、寒天生産地には必要だったのです。

テングサは、広範にわたる産地から船運で一大集積地であった大坂に集められ、次いで淀川を舟運で遡って河港の前嶋³⁾(図1)等に運ばれました。そこから、生産地の原(大阪府高槻市)(写真1)まで、京坂越えと称された街道を牛が引く荷車で運んでいました。内陸部の盆地に位置した原は、冬場の最低気温が零下を下回る寒冷な地域で、大坂から程よい舟運での距離圏に位置していました。そして、周囲の里山から、豊富な水や燃料の薪炭類が供給されました。加えて、後背地の丹波方面等から良質な出稼ぎ労働者の存在があったのです。彼らのことを、原では敬意を込めて「たんばはん」と称していたそうです。寒天は、農閑期の余業として位置づけられ、12～2月の厳冬期に製造されました。このことで、農業関係の労働力が容易に確保でき、地域の農地を寒天乾燥用の棚場として利用できたのでした。



図1 河港の前嶋。淀川兩岸一覽より。

2 寒天の生産地が徐々に内陸へ！

寒天の生産地が、冬場がより寒冷な地域へと徐々に移動しました。この様子は、「寒天業の発展」(図2)として、1:伏見で発明(1647年頃、正保～万治)、2:原へ伝搬(1781年頃、明和～天明)、3:原周辺に拡大(1790年、寛政2)、4:能勢(1804年頃、文化～文政)、5:丹波、信州(1840年、天保11)、6:六甲(西宮船坂)、川辺(川西、猪名川)(1868～1885年、明治年間)とされています⁴⁾。

兵庫県に関して、1868年:西宮・越木岩での生産開始⁵⁾、1869年:三田・高平で⁶⁾、1935年:西宮・船坂で生産が最盛期だったことについて、「最盛期は昭和10年ごろ。14～15軒で約300人もの人が製造に携わり、国内だけでなくヨーロッパへも輸出していました。」等の文献があります⁵⁾。

この生産地の移動には、「株仲間」と称された寒天製造組織の統制力の弱体化や、新規製造者の参入がありますが、主には、運輸手段が舟から鉄道に変化したことで、大坂からより遠い寒冷な地域に、生産の場を求めたことが関係していると思います。1900年代には、都市近郊の温暖化も影響したのかもしれませんが。温暖化に関して、文献では明治中期以降「温暖な気候」「温かい冬」の記述が散見できます。1904年:「大阪府の高槻・茨木付近の平野部の古い製造地が次第に消滅」⁷⁾、1914年:「大正三年の暖冬」⁸⁾、1951年:高槻・茨木付近の平野部の製造地は次第に消滅⁹⁾等があります。

鉄道では、「明治に入ると寒天の積出港は神戸・大阪・横浜に変わった。三港が輸出港となった理由は、神戸は後背地である摂津地域が古来からの伝統的・歴史的な寒天の大産地であったためであり、大阪は昔からの大寒天問屋が多数存在しており、阪神居住の中華商人が輸出業者として活躍したため、横浜は、関西より遅れて製造が開始された信州寒天が、1885(明治18)年の信越線(上野～横川間)開通によって輸送の便が良くなり後背地に成長したからである。」との記述があります¹⁰⁾。他にも、能勢電気軌道(能勢電鉄)が酒、コメ、寒天の三白の輸送¹¹⁾(1908年)を担ったこと、有馬軽便鉄道(国鉄有馬

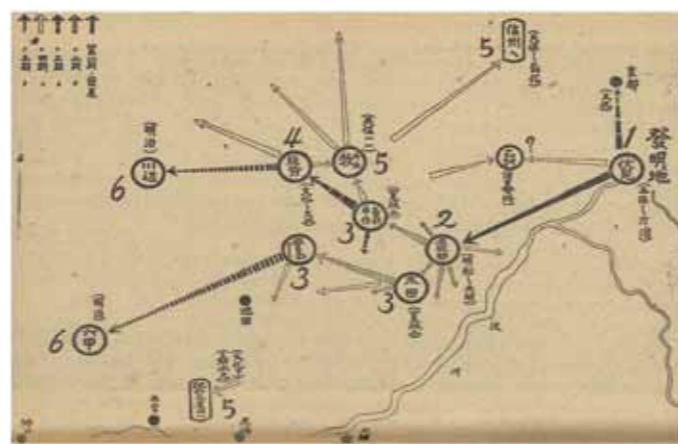


図2 寒天業の発展。寒天の歴史地理研究_P.22、第三図より。

線)が西宮船坂の寒天輸送に使われたこと¹²⁾(1915年)等があります。

労働力は、相変わらず丹波方面からの出稼ぎ労働者が支えていたようです。彼らが、新たな生産地に技術移転したように推測できます¹³⁾(写真2)。1954(昭和29)年度の氷上郡からの寒天出稼ぎ農家の資料があります。村名と人数は、成松3、佐治28、沼貫1、幸世56、芦田82、神楽76、遠坂62、前山8、春日部1、船越1、生郷1の合計319人¹⁴⁾となっています。行先別の人数は、能勢25、船坂32、亀岡32、高槻・茨木110、岐阜県恵那127でした¹⁵⁾。

このように各地域の経済に好影響を与えてきた寒天生産は、2021(令和3)年、兵庫では猪名川・下阿古谷を最後に終了しました。関西では唯一、高槻市檜田地区にて小規模ですが、生産が継続しています(写真3)。

現在、わが国の寒天生産は、より寒冷地である長野県、岐阜県等に生産の場を移して継続されています。

3 寒天を巡る発見！

110年ほど前の「六甲山の寒天山」

現在の渦森台の北東に「寒天橋」が現存し、その北部には「寒天山」と表記した地図(住吉村管内略図)があります。さらに、この住宅地の北端から六甲ケーブルの六甲山上駅を結ぶルートが「寒天山道」と命名されています。

今から110年前、1913(大正2)年頃の六甲・船坂での寒天の生産風景を書き記した大阪毎日新聞の記事「六甲の寒天山」がありました¹⁴⁾。小見出しには(一)雪と擬う寒天の晒場、七日間に三十万斤、(二)海草変じて銀線となる、暖寒と雨は寒天の大敵、(三)寒さ身に沁む晒し唄、金貨に替る海中の遺利、(四)(終)全山職工五百余人、丹波人士の活動力がありました。これまで本論で述べてきた寒天生産の状況を、短文で見事に表現していました。

90年ほど前の「糸寒天:満野商店」

猪名川町・杉生に残る寒天工場跡で木箱に入った90年程前の糸寒天を発見しました(写真4)。木箱には、合資会社満野商店、神戸市栄町六丁目の文字がありました。これから、1935(昭和10)年頃の満野商店の活動の様子がわかりました。「営業品目は天草、寒天、営業種別は製問屋、(テングサの)仕入地は伊豆、紀州、四国、九州、朝鮮、臺灣、(寒天の)販賣地は志那、南洋、印度、満洲、欧米」等であることがわかりました¹⁵⁾。猪名川、西宮等、神戸の後背地で生産された寒天が神戸港から輸出されていた様子が伺えました。

140年ほど前の「テングサと角・糸寒天:北海道大学植物園」

北海道大学植物園内に北方民族資料室があります。今年の7月に訪問した際、企画展示「札幌博物館と水産博覧会」があり

ました。展示の一部に、本物の角寒天、糸寒天、さらに日本各地産出のテングサが展示されていました(写真5)。これらは1883(明治16)年に開催された水産博覧会関連(東京上野)の資料とのものでした。今から140年前の本物のテングサ、寒天に出会えました。解説文、付帯文書には、京都丹波の犬甘(野)村産との情報と京都府丹波地域の地名と名前がありました。それらは、京都府下丹波國南桑田郡犬甘野村、名倉宗太郎、黒田新六郎等でした。亀岡市犬甘野には、今も、当時使われた寒天釜が、野ざらしで残っています(写真6)。

館長 中瀬 勲



写真4 90年ほど前の糸寒天。兵庫県猪名川町杉生。

(文献)

- 1) 利尻のテングサと海女の出稼ぎ【コラムリレー第13回】 | 集まれ!北海道の学芸員 (http://www.hk-curators.jp/archives/2495)
- 2) 原の寒天づくり、原下条「里づくり・摂津峡環境整備」委員会編集、有限会社ニュービット、2016年3月1日、P.9
- 3) 前島の絵図、淀川兩岸一覽、兵庫県立人と自然の博物館所蔵
- 4) 寒天の歴史地理学研究、阪本勇、大阪府経済部水産課、1951、P.22
- 5) 寒天 白く輝く | 西宮市ホームページ (https://www.nishi.or.jp/bunka/rekishito-bunkazai/mukashiphoto/funakasa.html)
- 6) 三田市史、第四巻近世資料、三田市、2006年、P.637
- 7) 原の寒天づくり、原下条「里づくり・摂津峡環境整備」委員会編集、有限会社ニュービット、平成28年3月1日、P.8
- 8) 北摂の寒天、中村浩、大阪春秋No.41、特集・大阪の伝統産業、1984、p.76-77
- 9) 高槻を中心とする大阪府下における寒天産業の歴史的・文化的・社会的特性、松本邦彦、大阪大学工学研究科、2014
- 10) 輸出品としての寒天、貿易量の推移を中心として、石坂 澄子、2017年度日本地理学会春季学術大会要旨集
- 11) 川西鉄道小史 注釈:序章 (http://www.sowa.com/kawanishi/K_610.html)
- 12) 有馬軽便鉄道(国鉄有馬線) | 西宮山口 (http://www.nishinomiya-yamaguchi-jp)
- 13) 氷上郡よりの寒天出稼ぎ農家の実態について、川那部治良、兵庫農科大学研究報告、農学編、2(1):115-119
- 14) 大阪毎日新聞1913.1.31-1913.2.4(大正2)
- 15) 神戸市商工名鑑、神戸市役産業課編纂(自昭和十一年八月至昭和十二年一月調査)、1936年

(注)

- 1) 写真をご提供いただいた芦田義則さん(兵庫県立丹波の森公苑)の記憶では、昭和27～33年頃のことでした。提供頂いた写真には、写っている方のお名前(全員がおおくなりになられている)、寒天作業での役割、撮影された地名、さらには前掛けから寒天会社の名前が読み取れました。出稼ぎに行かれた地名は、岐阜県恵那市大井町の恵北寒天・月星工場、岐阜県恵那郡遠山村遠山駅前の依寒天工場、岐阜県恵那郡加子田村、岐阜県恵那郡鶴岡村原等で、アルバム上にメモ書きされていました。恵北寒天・月星工場の写真に写った人々について、お名前と寒天作業上の役割が記されていました。それらは、堀頭梁、芦田釜脇、豊島上人、福井上人さんでした。頭梁、釜脇、上人は寒天作業上での役割です。
- 2) 文献中の表では合計が326人でしたが、合計数字は319人でした。